

その時わたしは

永井 緑

若宮三丁目

昭和二〇年八月十五日、私の手記は、当時の華北、北京市西郊区、永定西二路の社宅ではじまっていたはず。いま大切にしていた手記がみつからない。私は意を決して記憶をたどることにした。

半官半民の国策会社に勤務していた夫と、二歳になる北京市内で生まれた坊やと三人暮らし。五〇戸の赤レンガの社宅、朝夕には門の外を石炭の麻袋をつけたラクダが、カランカランと鉄鈴を鳴らして通っていくという平穏な日々であった。社宅には関西、九州出身の方々が目立っていた。みんな若く元気一杯、お国ことばのおつきあいであったと懐かしい。夫が国策会社勤務のため、一般よりいち早く、戦局、政局がつかめたらしく、八月十五日には重大な発表があるとのこと、社宅の中では数日前から何か恐ろしい予感のようなものが走り抜けていた。

八月十五日正午―。そのとき私は子供をゆりかごで揺すり、箱ラジオの前に座り、その放送を待っていた。

「玉音放送」―。ザーツザーツと海鳴りのような雑音の中に、

とぎれとぎれになって、海を渡って来ました。

私たちはその時まで天皇陛下のお声を聞いたことはなかったのです。生まれてはじめて耳にした天皇様のお声だったので、その内容はよくつかめなかつたけれど、天皇陛下が身をもって戦争を終わらせて下さる意味に受け取れたと思います。不思議な感動などと今だからいえるのですけれど。

それからの不安、おそれは、いわば敵国に変わってしまった外地に、どう処してゆくのか見当もつかぬものがあつた。

私は七か月の身重であつたので、八月十五日も庭先には生まれてくる子のために、万国旗のように煮沸消毒したおしめがひるがえっていたのを、丸めて防空壕の中に当座の食糧とともに投げ込むという風でした。接敵地区と呼ばれ、八路军が近くまで進出してきているとか、噂は広がるばかりでした。

夕刻、会社から夫が帰り（戦闘帽にゲートル脚判ばきスタイル）、事の重大さを伝えた。

五〇戸の社宅のうち、動けるものは即日身のまわりの品だけ

でトラックで城内へ移動するというので、身重の私たちと病人をかかえた家族七戸は置き去りにされることになる。

次の日から終日おびただしい砂塵をあげながら、城内へ城内へと人々はなだれ込んで行った（注 満鉄、電々等の他の会社も見習ったようだった）。

残された七戸は一か所に移り、固まって、助けあっていくことにした。四三戸の社宅はガランとして風が吹き抜けるが、ひまわりの花が咲いていたり、それぞれの庭に赤く熟したトマトが成っていて、明日への希望を感じさせてくれた。

私は信心深い両親に育てられたので、先祖へのあいさつは欠かさず、少女時代洗札をうけたので、どんな試練にも耐える気持ちでいたから、自分は困難の中から救われるに違いないと信じていた。

あわただしい敗戦の日々、北京市内では、日本人が危害にあっていると伝えられたり、間もなく社宅の外に続々と壕舎が作られていき、城内から日本人追い出しの形で、従来在住していた人々が集結してくるようになっていった。

残っていた私たちの家にも二家族が割り当てられ、三室と台所という、窮屈な暮らし。その頃から引き揚げという言葉もひんぱんにささやかれたが、当てのない空虚なひびきで、不安とあせり、食事も容易でない日々だった。万一に備えてか、社宅のまわりには、バリケードがはり巡らされ、残っていたひまわ

りの咲いていた方の社宅には、「熱河省」という所から、命からがら逃げのびてたどりついたという子供、病人をかかえた避難民が入り、もとわが家であった家も収容所になったということだった。医者も医薬品も思うに任せぬ状況下で、伝染病のためバタバタと死んでいくという話を聞いて悲惨だった。身重の私は出産をひかえ、気の毒に思っても何もしてあげられなかった。すぐ目の前のところで、こんなことがあったと今も心が痛む。家族を守ろうとする男たちも苦勞なことであつたらう。自治会を組織し、生きる道を手さぐりに、日本への引き揚げを領事館へ運動するといった積み重ねであつたようだ。

ある日、自治会から使役の役を引き受けた同居のKさんとMさんが、軍手、長靴をはいて出て行ったが、その日から、亡くなった熱河省の方々を焼いているのだと言った。少し離れた原野に石でかまどのような物を作り、たき物も充分でないので、容易でないと話していた。拾い集めた木々に石油をかけて、朝から晩まで焼いても焼いても到底白骨にはならないとこぼしていたが、その人の油が顔やからだにしみこんで赤ら顔で帰ってくると、あたりがむせっぽく切なかった。

こんな中で十一月十八日、私は男の子を出産した。Kさんの奥さんが助産婦さんだったので、本当に好都合で私は神様に感謝した。

庭先に深い穴を掘って、「胎盤」とかよこれものを埋めると、

夜に血のにおいをかぎつけてオオカミが掘りおこして食べに来るのだと聞かされ、寝ていた私は、こんな場所でこのような時に、よく無事に赤ん坊を産んだことよと思ひ、今も忘れない。

この住宅群を守るかのように、S隊長に率いられる戦車隊が駐屯していた。八月十五日以来武装解除され、丸腰になった隊員たちが、赤ん坊が生まれたと聞いて、喜んでやってくるようになった。

「オレたちのカタキをとってくれよナ」

戦いに敗れたことは彼等にとって痛恨の極みだったのでろうか。一度も敵に負けたことがないと自負している隊員たちだったが、引き揚げ船に乗船する時に、塘姑瀉頭たんくわまとうの港で再会した。

昭和二十一年三月二〇日、引き揚げの順番がやって来た。生後四か月の赤ん坊を背負い、三歳の子の手を引き、手に持てるだけの荷物を持ち、私は捨てていくおしめの布しか持てない。その時、夫がどこの誰が考案したのか、板切れに四ツ車をつけ、ヒモをつけて、精一杯の衣類などを積み、引っぱって歩いた。生来力仕事をしたことのない、いわば柔弱な人が、こうした時にはすごい力を発揮する。検査場へ行くまで、「背広とか二重まわし」などもあったはずでしたが……。

私は今も、不動明王とか、アシユラとか、こわい仏像をみる時、その時の夫をなぜか思い出すのである。

旧約聖書の出エジプト記に、さすらう民衆の姿が描かれてい

る。日本へ帰っていく時のさすらい人の姿は、まさにその通り、私の胸の奥に消えない。「LST」上陸用舟艇は私たちを日本の港へ送り届けてくれた。そのまま残されていたら、生きていかなかっただろう。何といっても、日本は良い国なのだ、と伝えていきたい。

帰ってみると、弟はレイテで戦死して、空の白木の箱と「遺髪、遺爪」が哲学堂の近くに戦歴碑とともに、眠っている。

大陸に骨を埋めるなどと、いばって大陸へ渡って行った私だったのに。

夫も七年ほど前亡くなり、この物語も風化しようとしている。